

◆私訳

近頃、たいそう多くの方が伝染病にかかって亡くなっております。しかし、これは決して、伝染病によって初めて死ぬのではありません。生まれたときから定まっている業の報いなのです。それほど深く驚くべきことではありません。

そうではありますが、今の時分にあって死去しますと、きっと伝染病によって死んだに違いないというように人は思うもので、これももったもなことでありましょう。それであるから、阿弥陀如来は、「末代の凡夫、罪業の私たち、罪がどれほど深くとも、我を一心にたのむ衆生を、かならずすくうぞ」と仰せられたのです。このような時は、いよいよ阿弥陀仏を深くたのんで、極楽に生まれかわることができると思って、一向一心に弥陀を尊び、疑うところをわずかばかりも持ってはなりません。

このようにわきまえたからには、寝てもさめても南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏申すのは、このよう私たちをたやすくおたすけくださる御ありがたさ、御うれしさを申し上げる御礼のころなのです。これをすなわち仏恩報謝の念仏というのです。あなかしこ、あなかしこ。

◆エッセイ

かつて阪神大震災の後、仮設住宅で「孤立死」が社会問題になった。内閣府の高齢社会白書（2010年度版）では、「誰にも看取られることなく息を引き取り、その後、相当期間放置されるような悲惨な死」と表現している。これは社会的に孤立してしまった結果、住居内で死亡して死後しばらく周囲の社会に気付かれず放置されていた状況を指してのものである。

先日、テレビで「遺品整理士」という仕事が紹介されていた。核家族化が進み、孤立死する人が、今や年間3万人に増えて注目されているようだ。故人の部屋の片づけ、清掃、不要品の処分などの遺品整理は、これまで遺族の方の手で行われることが一般的だった。しかし、現代のライフスタイルにおいては、時間的にも人手の面でも、ご遺族の力だけでは支えきれないのが現状だ。突然の死と遺品を前に遺族は途方に暮れる。そんな時に救いとなるのが、遺品整理のプロだ。この仕事は、遺品だけでなく遺族の「心を、整理する」ことだという。

生前、家族関係が円満な人ばかりではない。様々な理由で一人暮らしを続け、関係を断っていた人もいる。そういう依頼者に故人との関係の修復をお手伝いする。この遺品整理士が、依頼者に何としてもいってほしい言葉があるそうだ。

「あなたに頼んで良かった。」

単に遺品の整理をしてほしいだけでなく、亡くなった方とのつながりや思い出、生きていた証が確かめたい。そんな願望に応えられるように依頼者に配慮する。この方は、頼まれれば合同供養にお参りしたり、必要を感じてグリーフケアの学びもされていた。そこには、どこまでも依頼者に「同調」し「肯定」する姿があった。

「どうせ死ぬのに、なぜ生きる」というのは、人生における命題であろう。